平成二十一年度　東濃地区合同公演用　瑞浪高校演劇部上演台本

ここじゃない国のアリス

ゆもぺちほ原案・瑞浪高校演劇部　作

登場人物

A　青のアリス
B　黄のアリス
C　白のアリス
D　黒のアリス＊昌男
E　赤のアリス＊女王
F　バニー・ボーイ
G　忍者＊チェシャ猫
H　ヘンリエッタ・ラックス
I　ドードー・ザ・ダンディ
J　タロウ
K　帽子屋
L　三月ウサギ
M　チェシャ猫の妹

幕開け直前から、ＡＡＡの「サマーレボリューション」が流れている。真っ暗な素舞台。緞帳が上がりきってＭＥがフェイドアウト。やがて中央にゆっくりとサスが点く。一人の少女Ａが、うつむいて、両手を胸に何か握りしめて立っている。はっと気づいて辺りを見渡し、驚くＡ。その拍子に手から何か金属質のものが落ちてゴトっと音を立てる。それを合図に、上手にサスが点く。中に少女Ｃ。手に風車を持っている。

Ｃ　アリス。
Ａ　え？
Ｃ　アリス。
Ａ　アリス？　私が？
Ｃ　拾って。
Ａ　え？
Ｃ　それを拾って。
Ａ　これ、何？

下手にサスが点く。中に少女Ｂ。

Ｂ　涙の取っ手。
Ａ　何？
Ｂ　涙の、取っ手。

C　拾って。
B　大事なものだから。
A　大事なもの？
B　そう。だから私たちもほら。
C　こうしていつも首に架けている。

B・C、首飾りにした同じ金属質のものを、持ち上げて見せる。たしかに涙のような紡錘形をしている。

B　アリス、あなたもこうして架ければ？
C　大事なものだから。
A　これ、何なの？
B　忘れたの？
A　え？　そう、なのかな。
C　同じね。
A　同じ？
B　私たちも、来たとき、それを握ってた。
C　でも、何なのか分からない。
A　来たときって…、あ。アリスって、ここ、「不思議の国」？
B　ちがう。
A　え？
C　不思議の国じゃない。たぶん、ここは私たちがずっと来たかった場所。
A　私たちって…、私も？
B・C　そう、ここは、「ここじゃない国」！

ME。上手から何か黒いものが駆け込んでくる。黒づくめの上に、頭に黒いうさぎ耳を付けている。バニー・ボーイFである。Fは音楽に合わせて踊るようにしながら、三人の間を駆け抜け、Aの周りを駆け回る。Aはうろたえる。音楽が終わると、決めのポーズ。

B　まーた、来たの？
C　もう、うざいんだから。
F　「うざいうさぎ」。はっはっは。そのしゃれ、レベル低すぎ。
C　しゃれじゃないから！
F　おお？　今日もキレがいいね。アリス。
C　単にキレてるだけだから。「キレがいい」わけじゃないから！
A　アリス？　あなたも？
C　そう、私は白のアリス。
A　白の？　アリス？
B　そして私は黄色のアリス。
A　黄色。
B　あなたは？

A　私は…、アリス？　あれ？　ほんとに？
C　ポケットを探ってみれば？
A　え？

Aがポケットを探ると、青い玉が出てくる。

F　ラピスラズリ！
B　じゃあ、あなたは青のアリス。
A　青のアリス？
C　私たちも、ほら。

Bがポケットから黄色の玉を、Cが白い玉を取り出す。

B　私のポケットには琥珀の玉。
C　私のポケットにはジルコンの玉。
A　どういうこと？
B　私たちも、気づいたらここにいて、前のことが何も思い出せなくなってた。
C　はっきりしてるのは、これを握っていたことと、ポケットに玉が入っていたことだけ。
B　でも、このうざい黒ウサギに会って。
F　おっと、「バニーボーイ」と呼んでくれ。（ポーズ）
A　ほんとにうざっ！
B　で、いきなりこう呼ばれたの。
F　（うやうやしくお辞儀をして）アリス。
C　私も。
F　（うやうやしくお辞儀をして）アリス。
B　で、どうせ、この子も。
F　（うやうやしくお辞儀をして）そう、アリスだ。
C　よろしく、青のアリス。
B　よろしく。
A　よろしく。
F　よろしく。（ポーズ）
C　あんたにはよろしくしないわよ。
F　おおっ、うわさのツンデレか？
C　ちがうよ！　中途半端に若者ぶるんじゃないわよ！　入ってこないで。

F、びっくりして周りを見回してきょろきょろする。

F　え？　ここ立ち入り禁止？
C　場所じゃないって。

F　見えないドアノブをつかんで引っ張るが開かない。

C　ドアなんかないでしょ。話に入ってくるんなって言ってるの。

F　（携帯を出して）もしもし。

C　誰に電話してんのよ！

F　あ、お母さん？

C　は？

F　鍵かけたまんま、どこ行ってんの？

A　（その様子を見ていて）え？　ケータイ？

B　ああっ、そうそう聞いて聞いて。

C　何？

B　びっくりすることがあったの。

A　びっくりすること？

F　へーえ、あるんだー、実際。

C　何も聞いてないでしょ、まだ！

B　今朝、いきなり着信音で目が覚めたの。

C　うんうん。

A　着信音？

B　うん。これ。

Bが携帯を鳴らす。着メロはＡＡＡの「サマーレボリューション」である。

Aは、Bの携帯を奪い取って、電源を切る。息が少し荒い。

B　どうした？

A　ううん。…ねえ、これ普通にケータイとかある世界なわけ？

F　いや、どーかなー？

C　持ってるでしょ、そこに！　不思議そうに見るな！

B　でね、来たのがムービーだったんだけど。

A　ムービー？

上手にサス。ドレス姿の女王Eが登場。

E　聞いておるか、下賤の者どもよ。明日、夜が明けるまでに、五人のアリスがこの城に顔をそろえるように。遅れたら、その首、胴につながっていないと思え。（高笑い）

サス消える。話の間に、女王の前を横切って、忍者Gが登場。舞台を横切って、Cの持っている風車を、ハリセンに取り替えていく。

A　何あの、高飛車な奴。

C　赤の女王。

B　最大最悪のドS。
F　ドS！　ドって、高い方のド？　低い方のド？
C　そのドじゃない！

C、Fをハリセンでどつく。どついたCがびっくりして、手の中のハリセンを見つめる。

C　え？
B　ハリセンボン？
A　ボンは要らないから。
B　こんなの持ってたっけ？
A　風車だったよね。いつの間に？
B　手品？
C　いや、えー？　あれ？
A　あ！　そんなことよりなんか物騒なこと言ってなかった？
B　首が胴につながってないとか。
A　あれ、本気？
C　たぶん。
A　夜明けまでって、もう日が暮れるじゃん。
B　急がなきゃ！
A　でも、五人って言わなかった？
B　そう、それ。
C　あと二人、アリスがいるってこと？
B　だろうね。
C　じゃあ、とりあえずその二人を捜して、夜明けまでにお城に行くってことね。
A　なんか、いきなり大変なことになってるけど。

この間に、また忍者が過ぎり、Cの持っているハリセンを傘にすり替えていく。

B　じゃ、行こう！
A　道分かんの？
B　あ、そっか。
A　この子、天然？
C　うん、かなり。
B　うるさいなー。あ、ねえ、くそうさぎ。
F　バニーボーイだ。せめて黒うさぎにしてくれ。
B　ほかのアリスってどこにいるの？
A　お城へ行く道って分かる？
F　知っている。
C　どっちを？
F　両方。

A　やった！
B　どっちへ行けばいい？
F　知らない。
三人　はあ？
F　どっちも知っているが、君たちがどっちへ行けばいいのかは知らない。
C　何言ってんの？　うざい上に意地悪？
F　うざいのは認める。でも意地悪じゃない。
C　ちょっともう！　ねえ！　教えてよ！
F　知らないんだ。
C　このっ！　（振り上げた途端、傘が上の方でぽんと開く）ええっ？
A　ねえ、なんでいろいろ手に持ってんの？
C　なんか持ってないと不安じゃない？
A　そうかな？
B　らしいよ。も、いいよ、こんなやつ。とりあえずあっち行ってみよ。
A　そんなアバウトな。
C　でも、じっとしてるよりはいいんじゃない？
A　そうかなー。
B　レッツゴーッ！

三人は、上手に去る。照明青くなる。一人残ったF。

F　いるんだろ。

G、下手から出てくる。

G　いるといえばいる。いないといえばいない。
F　…今日の月は一段とでかいな。
G　何かをはらんでいるようだ。
F　はらんだのは五つ子か。
G　五色のアリス。
F　いいかげん、ニンジャごっこ飽きないか？
G　わりと気に入ってる。
F　そうか。
G　うん。もともと消えたり現れたりは得意だからな。
F　なるほど。でも、俺と話す時くらい、それ取ったらどうだ。
G　ん。（覆面を取る）
F　で、どうなんだ。あいつら。
G　さあね。
F　いっつも「さあね。」だな。
G　行き着くところには行き着くさ。

F　安心しろってことか。
G　そんなことは言ってない。
F　あいかわらずわけが分からんな、チェシャ猫。
G　お互い様さ。チェリーボーイ。
F　誰がチェリーボーイだ。
G　事実なくせに。
F　ふん。…そういえば、久しくお前の歌を聴いてないな。
G　そうかな。
F　歌えよ。
G　今は時期じゃない。
F　いつか時期が来るのか。
G　さあな。じゃ、そろそろ行くわ。
F　じゃな。

歌声。下手から、帽子屋Kと三月ウサギL、歌いながら、テーブルや椅子、ティーポットやカップなどを中央付近に運び込んで、お茶会の準備を始める。二人が用意した椅子は二脚だが、準備の隙をねらって、忍者Gがあと三つこっそり運び込む。

L　さあ、準備よし！
K　じゃあ、始めるとするか。

いつの間にか、忍者G入ってきていて、Lの手元へ手裏剣を投げる。

G　待てっ！
L　うおっ！

動きの止まった二人に、Gが壺のようなものを差し出す。

L　ああっ、びっくりした。
K　チェシャ猫か。なんだ、いきなり。

二人、壺の中をのぞいてみて、

二人　ああ！
L　忘れるところだった。
K　お茶会にはこれがないとな。
L　なんで今日に限って気が利くんだい？
G　大事な客があるからな。
L　客？
K　客なんて座る余裕は…、あれ？

L　いつの間に。
G　忍法、椅子増やし。
K　…客って誰だ。
G　じきに分かる。

G、下手に去る。入れ替わりに下手から、Hがやってきて、椅子の一つに無言で座る。二人はそれに全く無反応で座り、お互いにだけお茶を入れ合って、お菓子も用意して、食べたり飲んだりし始める。
上手から、ＡＢＣ登場。Ｃはぬいぐるみの熊をぶら下げている。

B　ねえ、なんかいい匂いしない？
A　あ、ほんと。
C　紅茶の匂いよ。たぶん、アールグレイ。
B　分かるの？　すごい。あれ？さっきと違わない？
C　うん。気が付くと変わってる。
B　なんで熊？
C　だから私、常に何か手に持ってないと落ち着かなくて。
A　いや、答えになってないぞ。
C　（鼻をひくつかせて）あれじゃない？　いい匂い。
A　何あれ。
C　たぶん、お茶会。
B　ねえっ、お腹空かない？
A　空いたー。
C　お呼ばれできるといいんだけど。
B　私、行ってくる！
A　いきなり失礼じゃない？
B　大丈夫、それとなく遠回しに探り入れてみるから。

B、すたすたとお茶会に近づいて。

B　あの。
L　？　何でしょう？
B　それ、食べたいです！
A　うわ。
C　直球ど真ん中！
L　あ、どーぞー。
B　ありがとう！
A　うわ、ここのマナー、簡単だな。
C　いっそすがすがしいわね。
L　そっちの二人もどうぞ。
A　どうも。

C　お邪魔します。

K・L、立ち上がって、三人を迎える。以降、三人も立ったまましばらく会話する。しかし、Hは座ったまま黙っている。

L　お待ちしてました。
A　え？
C　待ってた？　私たちを？
L　実はついさっき、あなた方が来るという予告を受けたものですから。
A　予告？
B　あ！　もしかして。
C　あのバニーボーイが？
L　！　バニーボーイ！　お前たち、あいつの仲間か！
C　仲間って。
B　あり得ないあり得ない。
A　まー、あんだけうざいとねー。
L　なんだ、そーかー。そう！　うざいっしょー。
C　何？　知ってんの？
L　いやだって、一応同じうさぎだし。
B　あ！　そっか。あんまりイメージ違うから、気が付かなかったけど。
L　まじ？　うれしー。もーね、あいつのうざさは半端ないからね。
C　一言言うたびに怒りがこみあげてくるわよね。
L　やっぱそう？　もー、あいつと耳が同じってだけで耐えられないからさ。プチ整形でとっちゃおうかと思って。
A　え？　それプチ整形ってレベル？
L　あー、今サービス期間でさあ、高須クリニックだと安いんだわ。
B　イエス！　フォーリンラブ。
A　それ違う。
L　今度会ったら決着つけてやる！
C　決着？
K　あのー。
四人　はい？
K　そろそろ終わってくれないか？　そのガールズトーク。お茶冷めるし。
A　あ！　すみません。
K　私は帽子屋。こっちは、
L　三月うさぎ。よろしく。
C　よろしく。私は白のアリス。
B　私は黄色のアリス。
A　私は…、（二人に目配せして確認の上）青のアリス？
L　疑問形？

Ａ　まだ慣れなくて。
Ｋ　慣れない？
Ｃ　あ、そういえば、この匂いってアールグレイですよね。
Ｋ　ほう、詳しいな。
Ｂ　このお菓子は？
Ｋ　洋なしとクランベリーのタルトだ。
Ｂ　おいしそう！
Ａ　その大きな壺は？
Ｋ　紅茶に砂糖とミルクを入れた後、最後の仕上げに入れるヒーラ。
Ｃ　ヒーラ？
Ｌ　僕たちのお茶には、ヒーラが欠かせないんだ。
Ｂ　ヒーラって？
Ｋ　死から生まれて、死を免れたもの。
Ｌ　限りある身から切り離されて、無限となったもの。
Ｋ　まさに、ここじゃない国にぴったりの調味料。
Ｌ　まあ、説明を長々してもしょうがない。座って座って。

三人座ろうとするが、椅子が一つ足りない。真っ先に座って食べようとしているＢをＣがつつく。ＡとＣは立ったまま。

Ｌ　どうした？
Ｋ　遠慮しないで。
Ａ　遠慮っていうか。
Ｃ　座れないんですけど。
Ｋ　え？　こことここここでいいんだが。
Ａ　え？
Ｌ　は？
Ａ　そこって。
Ｃ　その人が。
Ｋ　その人？
Ｂ　さっきからずっと座ってるんだけど。
Ｌ　ああっ。
Ｋ　もしかしてヘンリエッタが？
Ｂ　ヘンリエッタ？
Ｌ　君たち、ヘンリエッタが見えるの？
Ｃ　ちょっと怖いこと言わないで！

上手から、Ｆ登場。

Ｆ　そりゃあ、不思議でも何でもないさ。三月うさぎ。この子たちは…

Ｌ　バニーボーイ！　このうさぎ仲間の面汚し！
Ｆ　面汚し？

Ｆ、ふところからティッシュ的なものを出す。それを三月ウサギにじっくりと示してから、得意げにゆっくりと顔を拭く。そして、再び示して。

Ｆ　ビオレ、パーフェクトジェルシート！
Ｌ　そういうことじゃない！
Ｆ　何？　また間違えた？　どこが？
Ｌ　ここだここ！

Ｌが近づいてシートを指さす。その振り回している指先をＦがじいっと見るので。

Ｌ　ちがーうっ！　だから、きょとんとするなーっ。いいか、よく聞け。
Ｆ　お、どんな話だ？
Ｌ　黙ってきけ！
Ｃ　こいつ、誰に対してもうざいのね。

Ｌ、テーブルの下にあった剣を二本取りだし、一本をＦの足元に投げる。

Ｌ　拾え。
Ｆ　いや、…私はバニーボーイだ。弘恵さんじゃない。
Ｌ　！　それ！　拾え！
Ｆ　あ、この剣が弘恵さん？
Ｌ　ちがーうっ！　手を伸ばせ！　つかめ！　持て！
Ｆ　つかんだ！　持った！
Ｌ　今日こそ決着を着けてやる。
Ｆ　望むところだ。

ＭＥ。激しい立ち回り。一度はＬの剣をＦがなぎ払い、Ｌののど元にＦが剣をつきつけるが。

Ｌ　あ！　（ＭＥ中断）　あんなところにピチピチのバニーガールのお姉さんが！
Ｆ　え？　どこどこ？

あっさりとＬがＦの剣を奪い、足をすくってＦを倒し、のど元に剣を突きつける。

Ｌ　とどめだ。
Ｊ　待ったーっ！

上手袖から、Ｊの声が響く。颯爽とＪが駆けつけて、Ｌの剣を剣で受け止める。Ｊのいでたちは、桃太郎そ

くりで、背中には「日本一」の幟を差し、腕などに、猿と犬と鳥（ひよこ）のぬいぐるみをくくりつけている。腰にはコンビニの袋。

L　邪魔をするな。
J　いや、やらせるわけにはいかない。
L　君には関係ない。
J　義を見てせざるは勇無きなり。日本男子として、見過ごすことはできない。
L　双方納得ずくで始めた決闘なんだ。
F　うん、助太刀はありがたいが、負けは負け。潔く死なせてくれ。
J　ばかやろうっ！
L　ばかだって？
J　きさまら、どっちもうさぎなら、あの月を見上げて何か思うことはないのか。
L　あれは…
F　我らが祖先。
J　そう。はるか昔、三匹の獣がいた。
A　猿。
B　狐。
C　兎。
J　彼らは畜生道に落ちた我が身を憂い、来世では人間に生まれ変わろうと、日々よい行いを心掛けていた。
K、老人と化してよろよろ二三歩歩いたかと思うとばったり倒れる。

三匹　おじいさん！
J　ある日、腹が減って行き倒れていたおじいさんのために、三匹は食べ物を探し始めた。
A　キキキっ。俺は木に登って、果物を取ってきたぜ。
B　コーン。俺は鋭い爪とキバで鳥を捕ってきたぜ。
二匹　うさぎ。お前は？
C　うっ。
J　うさぎには木登りもできなければ、鋭い爪もキバもない。それでもうさぎは必死で食べ物を探した。
何か情報がないかと必死に聞き耳を立てたせいで、耳は長くなり、必死に探し回ったせいで、目は真っ赤になった。おまえたちのその耳と目は、その先祖の名残だ。
L　もちろん知ってる。
J　やがてうさぎが戻ってきた。
A　さあ、うさぎ。
B　お前の獲物を見せてくれ。

Cは、手からがらがらを何かを落とす。SE。

A　なんだ、これは木の枝じゃないか。
B　こんなものを人間が食えるか。

C　私は結局食べ物を見つけられなかった。せめて、これでたき火をして体をあたためてください。
A　なんて役立たずなんだ。
B　来世もまた畜生だぞ。
J　やがてたき火が赤々と燃えた。するとうさぎは、
C　おじいさん、ごめんなさい。私には自分を食べてもらうしかできないんです！

うさぎ、たき火に飛び込む。猿と狐は驚く。ME。おじいさんの姿が仏様に変わり、ウサギを抱き上げようとするが、重くて持ち上がらない。

K　無理！

K、あきらめて立ち上がる。C、ええっという顔で思わず見上げる。

K　私は仏の化身だ。このような殊勝な心がけの獣がいることを、世界は決して忘れてはいけない。お前の姿は誰の目にも見えるよう、あの月の表に未来永劫刻むことにしよう。
J　その先祖の姿が刻まれた月。その月の見下ろしているこの地上で、子孫のお前たちが殺し合う。納得づくだからといって、許されることだと思うか！
L　それを言われると弱い。
F　我が身を捨てて他人を救った先祖がいて、今の俺たちがいる…か。
L　今日のところは、剣を収めないわけにはいかないな。

皆、拍手。

B　さすが！　正義の味方、桃太郎。
J　俺は桃太郎じゃない。
B　えー。
A　でも、それ。
C　「日本一」の幟（のぼり）。
B　犬。
A　猿。
C　雉？
B　（腰にくっつけたコンビニの袋を指して）たぶんきびだんご。
A　どう見ても桃太郎でしょ。
J　違う！
A　じゃ誰よ。
J　タロウだ。
B　何太郎？
J　単なるタロウ。カタカナでタロウだ。

皆、戸惑って見つめ合うが、その空気を変えようと。

A　でも…、いやー男だねーっ。
B　ザ・男子？
C　いやむしろ、漢字の漢と書いて「漢（おとこ）」！
A　ライバルとかいる？
C　浦島太郎とか？
J　いやー、あいつは単なる亀に乗ったニートだから。
A　そうだっけ？
C　たしかにろくに働かないで白髪のじいさんになっちゃったわよね。
B　そもそも全然闘わないし。
A　悪ガキと闘わなかったっけ？　亀助けるために。
B　いや、単に買収しただけだって。
A　そーかー。
C　じゃ、やっぱり金太郎？
J　おお、あいつはすごい。（歌って）まっ！　さかーり　かっついだ　きーんたろお！
B　えええっ！
J　どうした？
B　だめだよ、女の子の前でそんなの歌っちゃ。
J　何？
B　え、だって、「まあっ！　さかりがついた金太郎」なんて…
C　ちょっと！
B　あの金太郎にさかりがついたら…、きゃーっ！
A　ちがうって！
J　そんな歌じゃない。続き聞けって。くーまにまたがり…
B　熊に！？　（Cのぬいぐるいみを奪って）金太郎すごすぎ！
C　（奪い返して）何考えてる？
J　「くーまにまたがり、お馬の稽古」だぞ。
B　いやいや、別のことの稽古だって。
J　いいかげんにしろ！
C　いやでも、金太郎って、坂田の金時になったんだよね。
A　源頼光（みなもとのらいこう）の四天王。武士になって出世して家庭持って。
B　一寸法師とかも、お姫様と結婚してるよね。
A　桃太郎さんは？
J　（突然泣き崩れる）うおおおおおっ！
B　どどどど、どうした？
C　なんか悪いこと言ったかしら？
A　モテなかったの？
J　モテたさ！　このルックスだ。でも、出生の秘密が…
C　出生の秘密って？
A　あ！

L　（突然ギャルになって）「えっ、桃から生まれたってどういうこと？」
K　「こっちの腿（もも）じゃないよね」
L　「ってことは、何？　人類じゃないってこと？　きもっ！」
K　「ってか、植物？」
B　あー。
J　なぜ桃から生まれちゃいけないんだ！
C　いいとか、いけないとかの問題じゃなくて。
J　桃の、ばかやろおおおっ！　なーにが、「どんぶらこ」だあああっ！

J、下手へ駆け去る。

A　…だから、ただのタロウか。
K　とにかく、穏便に済んで良かった。お茶を飲んで落ち着くとしようか。
F　じゃあ、椅子を持ってこよう。

F、下手に引っ込む。

K　ああ、ここにヘンリエッタがいるんだったな。
A　この人、たしかにヘンリエッタって人なの？
L　僕たちには見えないからなあ。
B　（姿の特徴を言う）
L　ああ、それそれ。
K　ヘンリエッタが見えるということは、あんたたちは…
F　住民じゃないってこと。

F、椅子を二脚持ってきて据える。

C　住民？
K　この「ここじゃない国」の住民なら、ヘンリエッタは見えない。
B　なんで？
L　さあ、むしろ僕たちの方が聞きたい。たぶん、ヘンリエッタも。
A　ねえ、この人、ヘンリエッタって誰なの？
L　今に分かる。
F　今に分かる。
K　じゃあ、改めていただこうか。
L　はい。ミルクと砂糖。
K　最後にこれを入れて。
B　ええと、なんってったっけ？
K　ヒーラ。
B　なんかジャムっぽいよね。

それぞれに注いで、三人が一斉に飲むが。

B　何？　うえっ、なんか口の中で動いた！

A　げっ、ほんと！

C　何これ、なんかの躍り食いってこと？

三人、椅子を落ちてのたうち回る。H、立ち上がって、その様子を見下ろしている。他の人物も立ち上がって。

K　私たちが住民でいるためには、どうしてもヒーラが必要。

L　ヒーラを飲んで苦しくなるのは、住民になれない証拠。

F　住民じゃない者は、僕たちには助けられないんだ。悪いね。

三人は、椅子やテーブルなどお茶会の用具をすべて持って、下手に去っていく。なおも苦しみ続ける。Hは黙ってその様子を見下ろしている。Aは転げ回る内、ポケットの中の固い物が痛いので、取り出してみる。幕開けに出てきた青い玉。それを見て、他の二人も玉を取り出す。三人が玉を寄せ合う。神秘的なME。苦しみが止む。Hは下手にゆっくりと去る。

A　あー助かった。

B　この玉すごいね。

C　お守りだね。

B　あー、でもなんかまだ気持ち悪い。

上手から、Dが登場。

D　どうしました？

A　なんか変な物飲んじゃって。

C　水かなんかない？

D　水…。

D、一度上手に引っ込み、水瓶を持ってくる。

D　はい、水。

B　ありがとう！

Bが奪うようにして飲む。続いてC、さらにAも。やっとみんな人心地がつく。

B　あー、なんかだいぶ楽。

A　助かった。ありがとう。おかげ様でなんとかなったみたい。

Ｄ　よかった。
Ｃ　あなたは？
Ｄ　僕は昌男。
Ｃ　まさお？
Ｄ　そう、中日の山本昌の「まさ」に、男って書いて昌男。
Ｂ　なんか今までの流れから浮いてる名前じゃない？
Ａ　ちょっと失礼だって。
Ｄ　あなたたちは？
Ｂ　私は黄色のアリス。
Ｃ　私は白のアリス。
Ａ　私は、えっと、青のアリス。
Ｄ　そう。よろしく。
三人　よろしく。
Ｄ　で？　みんな何してたの？　どっか行く途中とか？
Ａ　あ！
Ｃ　急がなきゃ。
Ｂ　やばいやばい！
Ｄ　どうしたの？
Ａ　あ、あのさあ、昌男。赤の女王の城って、どうやって行くか知ってる？
Ｄ　赤の女王！　なんでよりによってあんなとこへ？
Ｂ　なんかメール来てさあ。
Ｃ　夜明けまでに行かないと、なんかとんでもないことになるみたいなの。
Ａ　知ってるなら、道案内とかしてくれない？
Ｄ　できるなら、あそこには近付きたくないんだけど。
Ｃ　お願い。男と見込んで頼みます。
Ｄ　男か…。よし。分かった。
Ｂ　よかったー。
Ｄ　じゃあ、この先の資料室に行って、地図を探してみよう。
Ａ　資料室？
Ｄ　こっち。

四人、上手に去る。ＭＥ。下手から、ＦとＧが長机とホワイトボードを運んでくる。机の上に、ノートパソコンも置く。

Ｆ　このへん？
Ｇ　いいんじゃない？
Ｆ　まだ歌わないのか？
Ｇ　明らかに時期じゃないだろ。いくぞ。

二人、下手に去ると同時に、上手から四人登場。Ｃはでっかい浮き輪（ワニとか）を持っている。

D　うわ！　何それ？
C　頼りがい満点でしょ？　安心！
B　もはや手に持っているってレベルじゃないよね。
A　ここ？
B　なんかガランとしてるね。
D　主な資料は奥に並んでるんだ。
C　あ、パソコン？　ネット検索できる？
D　どうかな。やってみて。僕は奥で探してみるよ。
A　じゃ、私あっちで。

Dは上手、Aは下手に去る。Cはパソコンを開くが、

C　あなたは？
B　あ、あたし、字を見ると頭痛くなるから。
C　あー。

間。

B　ねえ。
C　何？　ちょっと忙しいの。
B　マサオって名前、ここだとなんか浮いてない？
C　まあね。
B　「マサオ」の「マサ」ってどう書くんだっけ。
C　（パソコンをのぞいたまま）「日（ひ）」二つ。
B　ああ。

B、ホワイトボードに「ヒヒ男」と書いて。

B　あれ？　こんな字あったっけ？
C　どれ？　（立って、ホワイトボードを見て）あのねーっ！
B　はい？
C　なんでカタカナ書くかな！　漢字の「日」だよ。漢字の！
B　あーなるほど。
C　しっかりして。

Cはパソコンに戻る。B、「炎男」と書く。

B　おー、この字なら見たことある。
C　でしょ。

B　いやー、でも「マサオ」って、耳で聞いたイメージより、なんか「熱い男」って感じだね。
C　？　そう？
B　いやだって、「火」が二つだよ。
C　あー、たしかに。
B　メラメラ～！　ぼおおおっ！
C　まあ、「日」二つだからねー。
B　あ、もしかしてマサオって「がんこ亭」の息子かな。
C　はあ？　（見に来て）あほかーっ！　（浮き輪で殴る）
B　いったーっ！
C　どこの親が、我が子にこんな名前付ける！
B　格闘家とか？
C　誰よ！
B　えー…、アニマル浜口？
C　あの人の子は「京子」！
B　「キョウコ」？　あ、それも強そう！
C　そうか？
B　ライオンみたいで。
C　ライオン？　…なんで？
B　だって、「けもの」の「おうさま」じゃん。
C　（自分でも空中に書いてみて）「狂う」って字だよ、そりゃ。ばかーっ！

A、下手から分厚い本を持って駆け込んでくる。

A　ねえ、これちょっと見て！
B　何？
A　この本。
C　「ここじゃない国の歴史」。へえ。
B　分厚いねえ。
A　で、開くとね。
C　え？
B　真っ白？
C　どういうこと？
A　さあ？　ネットは何か見つかった？
C　あ、そうか。もう少しなんだけど。

C、パソコンの前に戻る。

C　これ、どうやら、女王の城のホームページらしいんだけど。
B　ホームページ？
A　なんかイメージ違う。

C　で、これをクリック。

上手にサス。Eの姿が現れる。

E　ふん！　来たのか。中に入りたければ、その汚らしい指をよーくぬぐって、クリックするがよい。
B　うわー、むかつく。
C　クリック、と。
E　ほんとにクリックしおって！　自分の身分をわきまえよ。女王のホームページに入る権利が自分にあるかどうか、鏡をよーく見て、相談してから、
B　ますますむかつく。
C　じゃ、早送りと。

E、コマをいくつかずつとばした動きで、口をぱくぱくする。

C　このへんかな？
E　…以下のメニューからほしいものを選び、ひざまずいてクリックするがよい。
C　アクセス、と。

Eは無言で上手にはける。

C　え？　何これ。
B　川を渡って、海岸へ出て？
A　はるか先の島の、高い山の上？
B　行けるわけないじゃん。
三人　もーっ。

Dが本を持って上手から出てきながら、

D　いや、なんとかなるみたいだよ。
A　あ、昌男。
B　何か見つかった。
D　魔法の本。
C　魔法？
D　正確には魔女に魔法を使ってもらうための本。
B　ややこしい。
D　たぶん、一気に行けそうなんだ。でね、ここなんだけど。

三人、立ち上がって、Dの持っている本をのぞきこむ。ME。青い舞台。三人にサス。三人が本をのぞきこんでいると、下手から、FとGが出てきて、長机・ホワイトボード・パソコンを片づけ始める。それにBが気づいて。

B　あ、ねえねえ。
F　は？
B　魔女に知り合いいない？
F　魔女？
G　ああ、妹が魔女だが。
F　おまえ、妹いたのか？
G　うん。おーい！
M　はーい。

下手から、セーラー服に猫耳を付け、眉毛を太く描いたMが走ってくる。

M　どうもどうもどうも妹でございます～。
B　うわ、見たことあるキャラ。
C　そのまんまのパクリはだめじゃないの？
D　ほんとに魔女？
M　はい～。
D　お願いがあるんだけど。
M　なんでしょう。安全なことしか受け付けませんわ。
B　いっつも猛獣おっかけてるくせに。
C　しっ。
D　僕たちを女王の城に連れて行ってほしい。
M　あー、その本読んだの？
D　うん。
M　では、タダというわけにはいかないこともお分かりですね。
D　分かってる。連れて行ってもらう代わりに、これをあげる。

D、ポケットから、黒い玉を取り出して、Mに渡そうとする。

A　ええっ！？
B　ちょっと、この玉！
C　どうしたの？
D　気が付いたら、ポケットに入ってた。
A　それさあ、渡さない方がいいと思う。
D　僕は男だから、細かいことにはこだらわないんだ。
B　でもさっき、それのおかげで助かったからさあ。
D　助かった？

A・B・Cは、それぞれにポケットから玉を出す。

D　どうして？
A　昌男。あなた、もしかして、気が付く前のこと、覚えてないんじゃない？
D　ああ。
B　で、これも持ってる？
B、首飾りを示す。Dも驚いた顔で、胸から取り出す。AもCも示す。
C　バニーボーイ！　この人の名前は？
F　アリス。
C　やっぱり。女の子ってこと？
D　ちがう！　僕は昌男だ！
ME。D、崩れるようにひざまずく。A・B・Cは周りに駆け寄る。Cはその際、手に持ったものを落とす。
M　契約は不成立のようっすね。
M・G・Fは、長机などを持ち、Cの落としたものも持って、下手に去る。Dは苦しみが増していく。
A　大丈夫？
C　あっ！
A　何？
C　私、手に何も持ってない！
C、はいつくばって探すが、何も落ちていない。胸を押さえて苦しみ始める。
B　大丈夫？　ああ、どうしよう！
A　あっ、そうだ。あの玉。
AとB、自分の玉と、C・Dの玉を出して、かかげるが、何も起きない。
A　なんで？
B　さっきはたまたま？
A　しゃれ言ってる場合か！
B　え？　私、別にそんな…。（苦しそうにする）
A　どうしたの、みんな！　ねえ、しっかりして。
Bの携帯が再び鳴る。AAAの「サマーレボリューション」。A、苦しむ。
B　だれか！　だれかいませんか！　だれか！
A　助けてください！　助けて！

B　神様！

突然客席後方から叫ぶ声がする。

I　俺様を呼んだかい！

客電点く。テーマソング的なＭＥに乗って、Ｉが颯爽と舞台まで歩いてくる。その途中、

I　本当はピンスポで抜いて欲しいとこなんだが、ま、予算がない。客電で我慢しておこう。
A　誰？
I　呼んでおいて、それはないだろう。
B　呼んでないから！
I　何言ってるんだ。（客に）ねえ、はっきり呼んだよねえ。
A　誰に話しかけてんだ！
I　いや、知らない？　○○高の○○ちゃん。
A　実名を出すな！
B　もう勘弁してくださいよ。まどか先輩。
A　お前も先輩とか言うな！
I　よいしょっと。（舞台に上がる）お待たせ。
A　誰よ。
I　何、もしかして記憶喪失？　５分も経ってないのに。
A　は？
I　はー。さっきなんて言った？　「助けてください」…
B　かみさまーっ。
A　あ…。
I　思い出した？
B　神様？
I　イエース。…あれ？　おもしろくない？
A　だから、客に話しかけるなって。
I　いいんだよ、神様なんだから、何やったって。不可能はないんだから。
A　絶対嘘だね。
I　あーあ。信ずる者は救われる。信じない者は足元をすくわれる。
B　じゃ、すごいことやって見せて。
I　しかたない。久しぶりの奇跡といくか。（調光室の窓に向かって）まいまい、用意いい？
M　（窓を開けて）待ってー！
I　（音響席に向かって）くみは？
K　大丈夫！
M　（音響席に向かって）おい急いで！　お客さん待ってるから。
A　も、やりたい放題だな。
I　皆様、お待たせいたしました。奇跡の始まりです！

「ツァラツストラかく語りき」が流れる。最初のチャチャーンで、右手を高く上げたぴったりのタイミングでサスが当たる。以下、思い切り恰好をつけて、照明の位置を指示すると、その通りにサスが移動する。最後の盛り上がりでホリゾントが派手に点き、シルエットの中でポーズを決める。うっとりとしてポーズを決めたまま。

B　もしもし。
I　なんだよ、余韻を味わっていたのに。

照明戻る。

A　今の…何？
I　いやだから、世界を意のままに操っていただろうが。
B　照明は操ってたけど。
A　別に世界は…。
I　ロマンがない奴らだなあ。芝居でこういうふうに照明が変わったら…もう、一年生はこれだからやだ。
F　ショーは済んだか、ドードー。
I　あーあ。
F　まいまい、くーちゃん、おつかれ。
K　おつかれさまでしたー。
I　まだ不完全燃焼だぞ、バニー・ボーイ。
F　そんなに持ち時間やれんよ。
A　ねえ、この人。
B　ほんとに神様。
F　ま、ある意味ね。
I　ある意味って言うな！
C　どういうこと。
F　こいつの名前はドードー・ザ・ダンディ。知らないか、ドードーって。
A　もしかして、…鳥？
F　そうそう。割と最近までモーリシャス島にいた大型の鳥さ、人間に発見されて、あっという間に絶滅。
I　今じゃ、ここじゃない国の住人さ。
F　だから、ま、復活って言えなくもない。復活は神の特権だからね。
I　ほんとなら、あっちに復活したいがね。
F　はいはい。とにかく手早くすませて。
I　分かってる。

F、下手に去る。

A　ねえ、なんでもいいけど、助けに来てくれたんだよね。
I　何を？

Ｂ　この二人を！
Ｉ　あー、そりゃ無理だ。
Ａ　ちょっと！
Ｉ　どっちかというと、ほんとの神様はお前たちだからな。
Ａ　は？
Ｉ　とにかく城にたどりつけ。それでなんとかなる。
Ｂ　城に行けないから苦労してるの！
Ｉ　乗り物を手に入れろ。
Ｂ　乗り物？
Ｉ　なんでもいい。乗れさえすれば、城に着く。
Ｂ　よし！　なんでもいいんだね！
Ａ　あ、ちょっと。

Ｂ、下手に駆けていくが、すぐに戻ってきて、上手に駆け抜けていく。

Ｂ　乗り物乗り物乗り物…。
Ａ　ねえ、大丈夫？　乗り物ったって。免許も持ってないし。

キコキコというＳＥ。上手から、Ｂが三輪車に乗って爆走してくる。

Ｂ　乗り物ーーーーーっ！
Ａ　ちょっと、三輪車じゃん。
Ｉ　グッジョブ！
Ａ　えええっ！
Ｂ　やったー。
Ａ　ちょっと、どうやって、四人も乗るの？
Ｉ　いつ乗れと言った？　必要なのはノリがいいってことさ。
Ａ　え？　だじゃれ？
Ｉ　出発用意！
Ｂ　はい船長！
Ａ　誰が船長だ？
Ｉ　ゴー！

暗転。

Ｂ　…照明消えただけじゃん。
Ｉ　だから、これは空間をワープしてるっていう表現っていうか…、あーもう！　これだから一年は！
Ａ　ワープって何？
Ｂ　ほら、宇宙戦艦ヤマトとかで、ものすごく遠いとこに一気にびゅわーって。
Ｄ　あ、ヤマトって、リメイクされて映画になったんだよね。

C　古代進（こだいすすむ）が艦長になってるらしいね。
I　ごちゃごちゃしゃべんな！

ME。ゆっくりと照明が点くと、Iはいなくなっている。代わりに上手にEが登場している。周りを護衛するように、FGLMがひざまづいている。背景には、高さ八十センチくらいの生け垣の書き割りが五メートルくらいの幅で立っている。絵は薔薇の生け垣で、白い花が赤く塗りかけてある。Cの手には風車。

E　遅いではないか。愚か者ども。
A　まだ夜明けじゃないし。

CとDがゆっくりと起きあがる。

B　ああ、よかった！
A　大丈夫？
C　うん。
D　なんとか。

（注　上演時間と脚本準備期間の関係で、女王の正体が分かるまでが十分時間をとれていません。本来ならば、女王の高飛車な命令に周囲がいろいろ翻弄される展開があって、四人が反発するものの、女王の言動の一部にかいま見られる気の弱さを誰かが指摘し、ついに正体が分かる、という流れがほしいところです。）

E　やっとそろったな。
A　そろった？
C　五人いるんじゃなかったっけ？
E　そう、アリスは五人。

SE。Eがゆっくりと手を開くと、そこに赤の玉がある。

四人　ええっ？
D　女王も？
C　アリス？
E　私は赤のアリス。お前たちも、それぞれの玉をここに示すがよい。

四人、それぞれの玉を取り出す。

E　赤。
D　黒。
C　白。
B　黄。
A　青。五つそろうとどうなるの？

B　願い事がかなうとか？
E　私が五つをそろえたのは、
D　そろえたのは？
E　皆、この床に玉を叩きつけて粉々に砕くのだ！
C　ええっ！　どうして？
E　帰らないために。
A　帰らない…ため？
E　私は思い出してしまった。
B　何を？
C　もしかして？
D　ここに来る前の記憶！
E　そう。（この辺から、周囲の者が手伝って、ドレスを外し始める）思い出すがいい。私たちの居場所は狭い箱の中にしかなかった！
A　狭い箱？
E　そう、毎日毎日、これをじっと握りしめて。

ME。Eはドレスを脱いで、少女の格好になる。五人は等間隔で一列に並ぶ。その背後で、壁がぱたんと前に倒れると、便器が五つ並んでいる。チャイムの音。五人が架空のドアを開けて箱の中に駆け込む。ドア開閉のSE。皆、正面を向いて立つ。

E　トイレほど落ち着く場所はない。
B　チャイムが鳴ったら速攻駆け込む。
C　別に友達がいないわけじゃない。
D　いじめがあるわけじゃない。
A　でも、教室に一日中はいられない。
D　細かいことにぐちぐちこだわる、女の子特有の絡みつくような会話に耐えられない。
C　安心して本当の気持ちをさらけだして、心の底からよりかかれるような親友がいない。
B　気分が乗らなくても、求められれば、ずううっと面白いキャラでいなくてはならない。
E　立場の強い子、声の大きな子が言うことには、間違っていても従わなくてはいけない。
四人　あそこには私の居場所はない。
A　…私は…。

ME。AAAの「サマー・レボリューション」。A、ウオークマンを取り出し、聴いている内に次第にのってくる。他の四人は、Aのクラスメイトに変わり、きゃーきゃー盛り上がる。一人音楽を聴いているAに気づいて、Bが横合いからヘッドホンをいきなり取って聴く。

B　何これ？
A　…トリプルA。
B　トリプルA？　ねえ、知ってる？
E　どれどれ？　あーなんかオタクっぽくない？

D　へー、こんなん聞いてんだ。
C　だっさー。
A　…友達が貸してくれたから。
B　だよねー。自分じゃこんなの聴かないし。
C　あ、そういえば、「ポップティーン」の今月号読んだ？
A　あ。ううん。
D　え、買ってないの？
A　うん。
E　あんた、もういいや。
C　あの子、インだよね、イン。
B　うん。イン決定ーっ。

再び、五人横並びになる。

A　そう、教室は私の居場所じゃない。
五人　トイレでだけ、私は私の顔をしている。
C　でも、水洗の取っ手は離せない。

上手からおしゃべりしながら同級生（G・L・M）らが入ってくる。五人、一斉に取っ手を下に下げる。ざーっという水の流れる音。

E　誰かの気配がしたら、即、水を流す。
D　水と一緒に
五人　私も流す。

ドアを開けて皆外へ出る。入ってきた生徒も含め、みんなにっこり笑う。

A　…そうか。みんな今、あそことは違う自分になってるんだ。
E　この玉は、たぶん私たちをあそこへ戻す力を持っている。
B　そうなんだ。
C　これを壊せば、
D　帰らなくて済む。
A　ずっと、ここじゃない国にいられる。

五人は、顔を見合わせてうなずき合い、それぞれの玉を高く掲げて、寄せ合い、床に叩きつけようとする。

五人　せーのっ！

キーンという何かをつんざくようなSE。五人の手が止まる。下手から声。

H　待って。
A　…誰？

下手からH登場。

C　あなたは。
B　ヘンリエッタ？
D　誰？
A　私たちだけに見える人。
E　私たちだけ？
A　そう、私たち、五人のアリスだけに。
B　しゃべれるの？　ヘンリエッタ。
H　（うなずく。）
C　あなたはどういう人なの？
H　私はヘンリエッタ・ラックス。
C　ヘンリエッタ
D　ラックス？
E　どういう人なの？
H　ヘンリエッタの最初の二文字はHとE。ラックスの最初の二文字はLとA。
E　…それが何？
C　あ！
B　？
C　H・E・L・A。「ヒーラ」。
B　ああっ！
A　それ、お茶会の時の…
B　あの気持ち悪いやつ！
C　あれは何？
D　何のこと？
B　お茶の中に入れて飲んだら、口の中で動くような感じがして気持ち悪くなって…
D　ああ、だから倒れてたんだ。
B　そう。
C　あれが？
E　待って。
B　どうした？
E　なんか聞きたくない気がする。
H　そう。聞かない方がいいかもしれない。でも、聞いてほしい。
D　なんかやな予感。
H　ヒーラ細胞は、私の子宮頸ガンの細胞から作られた。
A　ええっ！
E　ああ！　やっぱり…。

H　私は三十一歳で五人の子を残して死んだ。でも、私のガンから細胞が切り取られ、実験用の株が作られた。それがヒーラ細胞。私の死後、五十年以上が経っても、ヒーラは死ぬことなく増殖し、今でも世界中で実験材料にされている。

C　（KとLに）お茶会であなたたちが言っていた…

K　死から生まれて、死を免れたもの。

L　限りある身から切り離されて、無限となったもの。

K　ここじゃない国で私たちが形を保つには

L　ヒーラを常に取り入れる必要がある。

A　ガン細胞を飲んだんだ…。

E　ヘンリエッタ。あなたはもうここにはいないのに。

D　ガン細胞だけがここに生き続けている。

C　ヘンリエッタ、あなたは私たちを怒っているの？

H　怒る？

C　私たちは、ここじゃない国にいることを望んでる。

E　ガンだけが不死となってここにいなくてはいけないあなたは、きっと私たちを怒っているよね。

H　…分からない。私は死んだから。

間。

A　どうしよう、私たち。

D　でも、やっぱり元に戻るのは苦しい。

E　うん。ここじゃない国にいられるなら、やっぱりいたい。

C　うん。

B　そうかも。

L　まだ分からない？　ううん、五人とももう分かっているんだろう。

A　分かっている？

H　「ここじゃない国」など存在しないと！

B　存在しないって。

C　現に私たちはここに。

K　ここは「ここ」じゃない。お前たちの「ここ」は、あの「ここ」しかない。

A　でも！

D　私たちがいるのは？

G　分かっているはずだ。

A　ここじゃない国！

F　という？

A　は？

H・F・G・K・L　「ここじゃない国」という劇だ！

途端に客電がフルに点き、場内が明るくなる。五人はおびえた様子で、それを見渡す。中央の音響席にIとJを見つけて。

B　あ、神様！
C　タロウ！
A　助けて！

音響席から、Ｉが。

I　俺は神様じゃない。音響係、兼キャストだ。
B　でも、さっき神様だって。
I　それは役の名前だって。それも本当の役名はドードー。もういなくなった鳥の名前だ。
J　分かってるんだろ。お前たちは、今もあのトイレの中にいる。取っ手を握りしめて、息を潜めている。
E　いや！

照明室の窓が開いて、Ｍが、

M　いやでも、お前たちは本当の「ここ」にしかいないんだよ。

ゆっくりと客電が落ちる。

K　さあ、この帽子に玉をすべて集めなさい。
L　その五つの色は、世界を構成する色だよ。
F　君たちの手の中には世界のかけらがあるんだ。
G　つなぎ合わせて、君たちだけの世界を作ればいい。

Ａが帽子を受け取り、一人一人がためらいながら玉を入れていき、その帽子を皆で持って、上を見上げ、

五人　私たちは、ここにいる！

ＭＥ。ゆっくりと暗転。上手下手のサスが点き、それぞれにＦとＧが残っている。

F　チェシャ猫。
G　ん？
F　行っちまったな。
G　ああ。
F　そろそろ終わりか？
G　ん？　そうだな、高校演劇は持ち時間六十分だから。
F　最後に歌えよ。
G　…ああ。

Ｇはサスの中で「beauty and harmony　作詞作曲　吉田美和」をアカペラで歌う。

歌の途中で、まず、Ｆのサスが落ちる。それと入れ替わりに、五人がトイレの中でじっと目をつむっている様子が明るくなって見えてくる。一人また一人と目を開き、一斉にドアを開け、左右を見て、お互いの存在を確認して深くうなづきあう。歌の最後に、Ｇのサスが一気に落ちる。五人の姿だけが残り、夜明けの色のホリゾント。皆で一緒に空を見上げている所で幕。

引用・参考

小説　「不思議の国のアリス」ルイス・キャロル

映画　「ホーリーマウンテン」アンドレイ・ホドロフスキー

戯曲　「スマナイ」ケラリーノ・サンドロビッチ

コント「バニー・ボーイ」ラーメンズ

お笑い　イモトアヤコ　フォーリンラブ

書籍　「大誤海」　ビックリハウス

アジア民話「月に刻まれたうさぎ」

昔話　「桃太郎」「浦島太郎」「金太郎」

ヘンリエッタ・ラックス　ヒーラ細胞　について　「３１文字に刻まれた短歌」松村由利子著

音楽　童謡「金太郎」　「ビューティー・アンド・ハーモニー」吉田美和

「ツァラツストラかく語りき」リヒャルト・シュトラウス

ＡＡＡ「サマー・レボリューション」

アニメ「宇宙戦艦ヤマト」松本零士原作